

幕末・明治期における播磨西部の肥料商の仕入れ動向

白川部 達夫

はじめに

本稿は幕末・明治期の播磨西部、赤穂郡相生浦の肥料商魚屋・濱本弥七郎家の「買仕切控帳」の検討から、瀬戸内海沿岸地域の肥料流通の一端を分析するものである。⁽¹⁾

魚屋弥七郎家は古くからの相生浦の住人で、天保期にはすでに相当規模の肥料商に成長していた。幕末期には赤穂藩から勘定所御用達しに任じられるなど、その豊かな財力が藩からも期待される存在であった。残された史料は、幕末・明治期に限られるが、「通帳」「買仕切控帳」などがあり、これにより瀬戸内海沿岸地域の肥料商が広い範囲から魚肥の買い付けを行っていた様相とその変動が明らかとなる。

分析する時期は幕末・維新时期から明治二〇年代までであるが、近代化の進むなかで、肥料市場も大きく変動した。海防のため蝦夷地の大半を幕府が収公し、松前藩の統制を廃止したため、北前船の進出が盛んとなり、鯡粕・羽鯡・数子などが全国市場へ向けて活発に運び出されるようになった。⁽²⁾ 北前船は、船主が自ら資金を投下して、積み荷を

買い集め、より有利な場所販売する買積み方式をとった。このため北前船は日本海・瀬戸内海を通じて大坂・兵庫に魚肥を売ることが基本としつつも、途中の有利な港で積み荷を自由に販売し、かならずしも中央市場を媒介にはしなかった。瀬戸内海諸港では、それぞれの背後の農村の発展に応じて、魚肥を周辺に販売する問屋・仲買小売商が成長して、幕末・維新时期には活発に域内交易が行われ、各所に地域市場が生まれていた。⁽³⁾ いっぽう明治一〇年代を過ぎると、三井・三菱の近代中央資本が北海道に進出し、現地買付や汽船を利用した運送などが始まる。北海道と中央を結ぶ汽船の航路も設けられ、運賃積みで魚肥を運ぶようになった。これにたいし北前船でも汽船の採用などがあり、明治二〇年代では中央資本が優勢を占めるにはいたらなかったものの、明治三〇年代には汽船・鉄道・電信網などの発達で地域価格差が縮まり、北前船の買い積み方式で地域格差を利用して、機動的に利益をあげる経営は旨みがなくなっていく、中央への集約が進んだ。瀬戸内海諸港でも、鉄道と結んだり、交通の要衝だった港が繁栄し、背後に大きな消費地をもたない潮待ちの港は停滞していった。

以上のような、市場変動を背景に相生の魚屋はどのように対応していったのか、仕入れの変化のなかにそれはどのように現れているかが、ここでの問題関心である。

一 相生浦と魚屋弥七郎家について

まず肥料取引に関わることに限って、相生浦と魚屋弥七郎家について紹介しておこう。

播磨国赤穂郡相生浦は播磨の西端の赤穂藩に属し、東側の山地を越えると、古くから瀬戸内海の良港として栄えた室津があった。室津には、西国から多くの船舶が入り、早くは薩摩産干鯛の陸揚港として栄え、近世後期には北前船が寄港した。一七世紀後半とされる記録では、家数五五八軒、人口三四七〇人、船数二五一艘だったとされる。⁽⁴⁾

相生は、深く入り込んだ相生湾の中間東側にあり、小柴や魚類の出入り港となっていた。また魚業も盛んで、ボラ座などがあった。⁽⁵⁾ 貞享五年（一六八八）には家数一五九軒、人口一〇五三人であったが、明治一四年（一八八一）には家数七〇八軒、人口三九四八人となっていた。相生地方は、南の海岸沿いの諸村は、瀬戸内海交易の発展のなかで、全体に人口が増加していたが、その後背地にあたる内陸部は、山勝ちの村むらで停滞的だったとされる。明治になっても、とくに有力な商品作物の栽培も見られなかった。木綿栽培が盛んになった姫路平野とはことなっていたといえる。魚屋の肥料販売については、相生浦

から内陸山方の村むらへ向けて行われていたが、こうした条件に規定されて、一人当たりの販売量は少なく、広く薄く展開していた。

魚屋（濱本）弥七郎家は、明治三〇年代末に編纂された「諸事録」などによれば、古くからの相生の住人で、宝暦年間の魚屋善七を近代の初代としている。⁽⁶⁾ この頃から魚屋を営んでいたのであろうか。仕入れ記録である「買仕切控帳」でも、明治二〇年代まで肥料とともに魚類の仕入れが記録されているので、最後まで魚屋としての業態をもっていた。⁽⁷⁾ 肥料商売をいつ始めたのかわからないが、「干鯛当座帳」が天保八年（一八三七）から残されており、その頃にはすでに相当の販売量が確認できるので、それよりかなり早い段階から肥料商売を行っていたと考えられる。⁽⁸⁾

「諸事録」などから同家の歩みを年表にしたが（表1）、三代弥七郎の天保元年（一八三〇）には、赤穂藩の御借り入れやその主催する御講に加入した功績で、藩の内外（「地他」）で名字を名乗ることを許され、嘉永二年（一八四九）三月には郡方勘定所配下の御札座御用達しに任命され、藩札の管理にあたった。嘉永六年（一八五三）五月に、不勝手を理由に願い出て、御用達しは一旦免除されるが、四代弥七郎になると、また藩財政を賄う立場に否応なく巻き込まれていった。四代弥七郎は明治四年（一八七一）に五代弥七郎に家督を譲り、明治一〇年（一八七七）に死去するが、「諸事録」では、四代目を中興の祖と称している。この頃までに醤油醸造業や絞油業なども行っていた。

表1 魚屋弥七郎家の経歴

年代	事項
宝暦年間	近代の初代魚屋善七
明和2年6月7日	2代弥七郎早世、上町惣七の子を養子として、 2代弥七郎とする
不詳	3代弥七郎、子供なく、分家善七の長女を養 女として、堀端利平の長男を婿として4代弥 七郎とする
天保元年10月18日	御借入並び御講加入につき地他名字御免
嘉永2年3月9日	郡方勘定所御札座御用達しを命じられる※
嘉永4年2月	3代弥七郎75才にて隠居を願う
嘉永6年5月3日	不勝手につき御用達しを免除される※
安政3年	4代弥七郎正政、年寄役となる
文久2年3月24日	赤穂藩より勘定所臨時御用懸を命じられる 旅帯刀差し免じ、藩主発駕・帰城の送迎を命 じられる
文久3年11月	
慶応元年閏5月14 日	油絞業免許
慶応2年11月21日	大砲車1、献上につき袴地1反頂戴
明治元年2月12日	出陣に梅干し4挺献上、地他とも帯刀免除
明治元年12月2日	勘定所御札座三御役所御用達しを命じられる
明治2年正月元旦	籠にて登城年頭御札
明治4年3月	室津井筒屋定吉と仲間て神明丸購入、北海 道・樺太航海
明治4年	5代弥七郎正明家督相続
明治5年秋	神明丸樺太破船
明治10年4月9日	4代弥七郎死去(当家中興の祖)
明治17年4月	大阪にて住吉丸24枚帆724石積みを購入
明治17年12月15日	弥三兵衛へ醤油業譲与、分家する
明治18年3月	加賀江沼郡橋立村寺谷源七持船幸徳丸に4分 資本加入
明治23年11月17日	5代弥七郎隠居、6代弥七郎正治襲名
明治24年12月	神戸取引所仲買人営業のため組合会社設立
明治26年4月	組合会社、分家の放蕩により破綻
明治27年3月14日	肥料商業を休業する

出典：濱本家文書17-1「談事録」、※嘉永2年、同6年は
15-119慶応3年正月「年々諸用事帳」で補足。

廃藩置県以後、五代目は公職には就かなかつたが、神明丸や住吉丸の船舶を買い込んだり、加賀橋立の北前船主寺谷源七の持船幸徳丸に出資を依頼され共同運営にあたりたりして家業に励んだ。明治二三年(一八九〇)に五代弥七郎は隠居し、六代弥七郎正治が家督を継いだ。その翌年神戸取引所の米穀肥料仲買人営業のため、分家二軒と入野村高田万蔵、神戸市栄町四丁目の吉田有雄とともに組合会社を結成した。この仲買人経営は野村・吉田が手を引いて魚屋のもとで運営されたが、担当の分家が資金を流用・放蕩したため明治二六年に破綻した。そのこともあってか明治二七年(一八九四)三月には魚屋は肥料商を廃業することになった。

この年一二月の同家の資産は相生・那波・若狭野・有年・高田・高雄・布施・戸原八カ村に田三一町七畝一一歩、畑宅地一町九反一畝二九歩、山林原野四〇町六反六畝九歩、地価合計一万六七八二円六一錢三厘、入附米高三九七石一斗八升九合、麦七石二斗九升九合、所得金額三三七〇円となっていた。明治三十一年の『日本全国商工人名簿』によると、同家は赤穂郡内の一四人の大地主の一人であ

り、納税額は一万三七六四円余で七番目だった。⁽⁹⁾

明治二九年（一八九六）赤穂銀行貯蓄部ができると代理店となり、弥七郎はその取締役となった。また同年赤穂商業銀行の発足には発起人に加わり監査役、同年岩見銀行の創設では発起株を引き受け、取締役となった。また那波銀行の監査役、相生銀行の取締役となった。日清戦争後の企業勃興のなかで地方銀行の設立ブームと地域金融の再編が起きていたが、六代弥七郎はこれに積極的に対応して、地主・銀行家へ転身していったのである。⁽¹⁰⁾

二 弘化・嘉永期の室津仕入れ

魚屋の仕入れの全貌がわかるのは「買仕切控帳」が残る安政七年（万延元年）からであるが、それより以前について、室津の有力肥料商との取引を記録した通帳が弘化年間から残っているので、これについて検討しておこう。室津は近世では、姫路藩から干鰯市場を開く特権を与えられ、姫路平野の肥料取引の中心となっていた。ことに相生に近接して、魚屋の仕入れでも高い比重を占めていた。

A 嶋屋半四郎との取引

表2は室津の有力干鰯問屋嶋屋半四郎からの仕入れ状況を示したものである。干鰯問屋との取引は、固定されたものではないので、毎年状況により変動する。弘化・嘉永期の買付総額では弘化二年（一八四五）が銀一五貫余と最低で、嘉永元年（一八四八）が六八貫

余で最高となっている。春先は、五島・佐伯・宇和島（宇和）などの西国からの鰯肥料が入荷し、八月頃から鯡粕・羽鯡・数子・白子などの蝦夷地産の鯡肥料が入ってくるので、これが仕入れられている。肥料は鰯と鯡を加工したものが中心であるが、それ以外に、キビナゴ・鱈・鮪・鯧・鯖・蟹・アミなどがあつた。これらは瀬戸内海産のものが多かった。また粕については、アツタ（厚田）・マシケ（増毛）・城下（松前城下）・カヤベ（茅部）・唐太（樺太）など蝦夷地などの地名の付いたものがある。これらは、鯡粕か鰯粕か判断ができないのでそのままとした。五島・越後角田・荒川（越後か）・紋別など地名だけのものもあるが、五島は明らかに干鰯で、紋別は鯡と見られるが、外は明記がないのでわからない。越後角田・荒川などは干鰯の可能性もあるが、鰯も獲れるので断定できない。

仕入れ銀高で見ると、鯡粕などの蝦夷地産の魚肥が中心となっている。これらは七、八月から一二月にかけて、北前船で瀬戸内海へ入荷して、買い付けられる。この時期は、夏作は終わっているので、秋冬作に販売するほか、多くは来年の春作のために蓄えられていたと考えられる。

室津の嶋屋半四郎との同時期の取引については飾万の嶋屋仁左衛門の分析の時にすでにふれている。⁽¹¹⁾ 飾万津は、近世初期姫路城建設にあたって、その外港として開かれ、近世後期には嘉永元年に室津に並んで干鰯の市売を認められた。姫路平野の中心部に位置し、物資の出入

表2 室津嶋屋半四郎よりの仕入れ

年代	品目	俵数 (俵)	重量 (貫)	代銀 (匁)	産地
弘化2年	干鰯	30		921	五島
	キビナゴ	19		238	五島
	メ粕	30		1,425	走水
	鱈粕		849	2,478	
	焼鱈		302	754	
	粕		1,655	4,682	アツタ・マシケ
	数子		1,225	4,931	
	小計	79	4,031	15,430	
弘化3年	干鰯	64		2,650	五島
	鱈		5,037	13,760	
	鱈粕		2,240	6,451	
	外割		859	2,576	
	粕		1,889	5,539	城下
	アツタ		1,946	5,128	
	さき		158	544	
穴粕		2,057	5,354		
	小計	64	14,185	42,003	
嘉永元年	干鰯	2286		10,044	五島・佐伯・壱岐
	メ粕		353	1,305	佐伯
	佐伯直し		484	1,344	
	その他	461		4,277	鯨・越後角田・荒川
	鱈		1,592	4,312	
	鱈粕		2,605	7,100	
	羽鱈		3,910	10,254	
	外割		482	1,332	
	目切		79	127	
	数子		2,176	7,425	
粕		6,302	17,657	マシケ・城下・唐太	
その他		1,079	3,322	紋別	
	小計	2747	19,061	68,499	
嘉永3年	干鰯	135		4,121	五島
	メ粕	50	262	3,012	宇和・白杵
	碎		754	1,335	佐伯
	キビナゴ	143		1,740	五島・長崎
	鱈	11		161	五島
	鱈取		270	715	
	平子	209		1,864	仙崎・石見
	鯖	45		239	対馬
	鱈いり	482		1,021	
	鱈粕		1,758	4,615	
	羽鱈		830	2,344	
	数子		388,673	2,097	
	白子		878	2,670	
	粕		1,137	2,723	城下・カヤベ・穴
	目切		16	32	
	身欠		394	1,202	
玉粕			232	604	
アロ	13			183	
	小計	1088	395,203	30,678	
嘉永6年	キビナゴ	43		459	
	鱈干鰯		590	1,563	
	鱈粕		1,526	4,955	
	羽鱈		430	1,317	
	本マシケ		279	865	
	粕	10	1,830	6,703	しび・宇粕・古平・マシケ
	その他	293		3,103	かに・にご・あら・アミ
	小計	346	4,655	18,965	

出典：濱本家文書15-61、62、192、63、64、各年度の「干鰯通」。

りの利便性が強みだった。しかし河口にあるため港の底が浅く、これを改修して船舶の入港に便宜を図っていたが、明治一〇年代でも港の入り口の底が浅く干潮時には一〇〇石積みの船でも通過できない状態で、その浚渫を図っているところだったといわれる⁽¹²⁾。このため明治期まで室津との取引も継続していた。飾万の嶋屋仁左衛門の取引ですでに指摘したように、室津問屋の口銭は一パーセントで、同じ姫路藩領だったので一部には藩札での支払いが行われていた。

嶋屋仁左衛門の場合、嘉永二年（一八四九）の仕入れ額が銀六〇貫余で、以降、飾万の市場での買付が中心になっていったためか、安政五年（一八五八）に銀六一貫余となった以外は振るわなくなっていた。また仕入れは鮭粕・羽鮭が中心で、魚屋ほどは西国産の干鰯など多様な仕入れは見られなかった。さらに魚屋の場合、藩札での支払いは記述がない。室津は姫路藩、相生は赤穂藩だったので流通はなかったのかもしれない。また未払い分の利子については、記述はあるが、対象となる期日があつたりしていない。この点は、つぎの鍋屋甚右衛門の場合に検討することにする。

B 鍋屋甚右衛門との取引

魚屋には、嶋屋半四郎の外に、室津の問屋鍋屋甚右衛門の通帳が残っている。表3に鍋屋からの仕入れを示した。嘉永五年（一八五二）と翌六年の通帳であるが、嘉永五年が銀三二貫余、嘉永六年（一八五三）が銀一六貫余となっている。嘉永五年は、嶋屋の仕入れ

表3 室津鍋屋甚右衛門よりの仕入れ

年代	品目	俵数 (俵)	重量 (貫)	代銀 (匁)	産地など
嘉永5年	干鰯	531		5,811	宇和・五島・長崎・野茂
	鮭粕	15	1,812	5,551	佐伯
	碎	100		1,879	宇和・佐伯
	平子	22		176	石見
	その他	97		3,383	宇和統・五島キビ・鯛粕
	鮭粕		3,705	9,472	
	羽鮭		852	2,058	
	鮭		1,318	3,479	
	数子		17	81	
	その他		287	715	唐太
	小計	765	7,992	32,604	
嘉永6年	干鰯	184		4,334	五島
	鮭粕		2,765	9,181	
	鮭粕		669	1,941	
	数子		329	1,811	
	種粕		70	155	すぼし・アミ・灰くず
	その他	160	612	3,912	
	小計	160	4,446	16,999	

出典：濱本文書15-143、144各年度の「干鰯通」。

の少ない年を越える程度になっている。嘉永六年は、嶋屋も鍋屋からも仕入れ量が少なかった。品目では、嘉永五年は西国産の干鰯・メ粕などを全体の半分を占めるほど仕入れていた。

嘉永五年(一八五二)の通帳の冒頭から、取引の状況を見よう。⁽¹³⁾

覚

亥十二月差引残り

一、式拾四貫三百七拾匁七分式り

り式貫百五拾四匁三分七り

式百廿一日

(中略)

正月五日

一、羽鯡百丸

此メ八百五拾四貫四

九匁正ミ

七百七拾七貫五百四匁

廿四匁三分かへ

代耆貫八百八十九匁三分三り

(中略)

代メ式貫九百四十八匁三分三り

又廿九匁四分四り

口銭

又廿五匁

掛物

メ三貫式匁八分三り

り式百廿式匁式分式り

百七拾五匁壹分六り

百九十日

冒頭では、前年の差し引き残りが銀二四貫余と示される。これについて利子が銀式貫余となっている。その下に「式百廿一日」とあるのが貸付期間で、日歩で計算が出されている。正月から数えるとこの年は四月に閏月があるので七月一日が二二一日目にあたる。通帳は益暮れに精算が行われるので、ほぼ一致している。計算すると日歩四毛が利子だったことがわかる。太陽暦で年利にすると一四・六パーセントとなる。

前年度の差引残の記載の後に、嘉永五年(一八五二)の取引が記載されるが、この年は羽鯡を正月に買い付けていた。羽鯡一〇〇丸の重量に、〇・九一を乗じて正味重量を出し、これに一〇貫目当たりの価格銀二四匁三分を乗じて代銀が算出される。比率を定めて正味重量を出すのは、俵引きと称して俵の重さを引いたりするのを一律にしたためであるが、乗じる数字は時に変わっている。こうしてその日の取引品目ごとに代銀を記載し、口銭・掛物代を加えて支払い総額が決まる。口銭は一パーセントで室津は共通している。掛物は荷造りや船への積み賃などであろう。代銀には利子が付いたが、こちらは日歩三毛で、年利一・二パーセントだった。これは嘉永六年の通帳も同様で、鍋屋の場合、その年の内は日歩三毛、年を越すと日歩四毛としていたようである。

三 万延・慶応期の肥料仕入れ

表4-1、2に万延元年（一八六〇）より慶応二年（一八六六）までの魚屋の仕入れを示した。

表4-1は仕入れ先ごとの集計である。仕入れ総額は、万延元年（一八六〇）が銀一三八貫余で文久期には一七〇貫匁、慶応二年（一八六六）には銀六九五貫匁となり急増した。慶応期は幕末の物価上昇が頂点に達した時期なので、割り引いて考えなければならぬが、それでも仕入れ量はかなり増加したようである。仕入れ先の銀高合計の比重は、室津が圧倒的に多かった。しかし上方・西国も一定数あり、ことに慶応二年（一八六六）にかけては、西国からの仕入れが増加したといえる。

上方では、兵庫・大坂・西宮の肥料商からの仕入れが見られた。兵庫が中心で、瓜屋半兵衛との取引は継続的だった。魚屋は魚類販売も行っていたので、兵庫では瓜屋の外に、兵庫匠町の山田屋源十郎との魚類の継続取引を行っている。しかしこれは魚肥を含まないので表には出ていない。ほかの打出屋以下は帳簿上「入組」に分類される、その場限りの取引と理解されていた。瓜屋半兵衛（湊町）も打出屋（船大工町）も明治三年（一八七〇）の兵庫干鰯屋仲間「戎講印形帳」では年行司を務める干鰯屋であった¹⁴。また大坂の鷺屋与七郎については、住所が大坂海部堀と記載されているので、大坂の干鰯屋仲間の一

表4-1 幕末期の仕入れ先（単位：銀匁）

居所	名前	万延元年	文久元年	文久2年	慶応2年
兵庫	瓜屋半兵衛	7,956	9,558	1,173	
	打出屋治兵衛	1,238		1,637	
	他			2,724	
	小計	9,195	9,558	5,534	
大坂	鷺屋与七郎	402	1,300		
西宮	ざこ屋喜助		1,605		
	上方小計	9,596	12,462	5,534	
室津	金屋長左衛門	5,421	1,244	2,913	
	嶋屋半四郎	103,332	152,674	106,263	331,228
	鍋屋甚右衛門	12,400	4,046	2,030	70,139
	その他	1,084	173	45,444	79,504
	室津小計	122,237	158,137	156,650	480,871
下津井 軈 尾道 高松 他		420	2,415	4,892	6,860
	大坂屋万右衛門				93,613
	泉屋亦右衛門		5,335		1,793
	他	2,439		9,029	46,790
	西国小計	2,859	7,750	13,922	58,745
	不明	3,634	696		6,700
	合計	138,326	179,045	176,105	695,373
	上方の比重	6.9	7	3.1	0
	室津の比重	88.4	88.3	89	69.2
	西国の比重	2.1	4.3	7.9	29.9
	不明の比重	2.6	0.4	0	1
	嶋屋半四郎の室津の比重	84.5	96.5	67.8	68.9
	嶋屋半四郎の全体の比重	74.7	85.3	60.3	47.6

出典：濱本家文書15-72~75各年度の「買仕入控帳」。

人であったと考えられるが、一致する人物はいない。ただ鷺屋は古くから仲間にいるので、その一人だったことは間違いないであろう。¹⁵⁾ ざこ屋喜助については西宮の干鯛屋仲間帳に、雑古屋などの名前はあるが天保期までの記録しかなく、一致するものはいなかった。¹⁶⁾

室津での取引は、先に検討した嶋屋半四郎が中心であった。銀高では嘉永元年(一八四八)では銀六八貫匁余で、その後、やや停滞して嘉永六年(一八五三)には銀一八貫匁余となっていたが、万延元年(一八六〇)には銀一〇三貫匁余に売り上げを伸ばして、慶応二年(一八六六)には三三一貫匁余となっていたことがわかる。仕入れの比重に付いてみると、最大となった文久元年(一八六一)では室津取引の九六・五パーセントを占めた。全体にたいする比重でも、この年は八五・三パーセントとなったから、その大きさが明らかである。しかしこの年をピークに慶応二年には全体で四七・六パーセントにまで低下した。文久二年は室津の占める地位はそれほど変わらないが、室津のほかのものからの購入が増加しことが、嶋屋半四郎の比重を下げることになっている。ことに室津端町干鯛屋儀三郎からの仕入れが銀三五貫余あったことが大きかった。また慶応二年(一八六六)には会所の干鯛屋伊三郎・亀屋伊三兵衛との取引が大きかった。これは幕府が、安政四年(一八五七)に箱館物産会所を設立し、鮭粕以下の物産の取引を統制しようとしたことにより、翌年には江戸・大坂・兵庫に会所ができ、文久年間には堺・敦賀・京都・下関・新潟と会所が設立

され、それが室津にも及んだものである。¹⁷⁾ 干鯛屋伊三郎・亀屋伊三兵衛はその運営を任された問屋仲間だったのである。表にはないが、魚屋の記録によると文久三年(一八六三)は、松前建入船が例年より遅れ、魚肥が高騰した。この時、嶋屋半四郎の手船栄勇丸が登つて、ル、モツヘイ(留萌)粕一六〇〇余を積み帰ったとある。¹⁸⁾ 嶋屋は自ら手船で直接、蝦夷地の魚肥を買い付けて室津で販売していたことがわかる。もちろんそれは嶋屋の取引の一部であろうが、北前船経営にも乗り出していたことは指摘できる。

西国は下津井・鞆・尾道の口座とその他の入組のものがある。備前下津井は岡山藩の玄関口にあたり、北前船などが寄港した。この時期は、天王丸喜代蔵・浜屋栄蔵・津国屋伴助などと取引があった。なお慶応二年(一八六六)には「尾之道津伴」(津国屋伴助)ともあり、さらに後には、尾道中浜の肩書きで現れ、尾道の津国屋伴助との取引が多くなる。両者の関係ははっきりしないが、ここではこのままとした。鞆は大坂屋万右衛門との取引があった、大坂屋万右衛門は北海道産荷受問屋で、鞆に入港した北前船主の魚肥の販売を引き受けていた。幕末・維新时期には自らも和船を所有して、北海道・日本海で買積み船経営を行っていた。大坂屋とは魚肥の外に、米や大豆などの取引があった。鞆は近くに福山の木綿作の盛んな平野部があり、明治二〇年代まで繁栄したが、やがて尾道に北前船の寄港が移って衰退するようになった。¹⁹⁾ 讃岐高松では泉屋亦右衛門との取引が明治期まで続いている。

八六・一パーセントとなり、以下、文久元年（一八六二）、同二年は若干低下するものの、慶応二年（一八六六）には八八パーセントに及んだ。安政二年（一八五五）に蝦夷地は幕領化され、北前船などが奥地まで魚肥を買い付けに入ることができるようになった。このため鯡粕などが大量にもたらされるようになり、鯡肥料の利用が進んだ。

西国産では干鰯がどの年も仕入れられている。五島中羽・五島など五島列島産のものが中心で、佐伯・宇和（宇和島）・仙崎（長門）・長崎・秋田などのものがあつた。仕入れ先にとくに特徴はなく、嶋屋半四郎から仕入れたものが多い。室津に入荷したものを買ったということであろう。五島産の干鰯が入荷の中心だったことは嘉永期にもいえることであつた。

メ粕は魚類を煮て油を取り、絞めたものであるが、鰯メ粕では佐伯がほとんどであるが、なかには鱈干鰯などもあつた。

キビナゴは万延元年（一八六〇）では五島キビとあるが、後はただキビナゴとあるだけで産地はわからない。しかし嘉永期には五島産のものが恒常的に仕入れられていた。

煎は「いり」と書かれ、仙崎いりとか鯨（ハゼ）いりというように、地名や魚名が付けられている。鮪（シビ）いりなどもあり、小魚を煎つたものを肥料とした。室津の金屋長左衛門などから継続的に仕入れている。価格が安いこともあり、補足的に用いられたのであろう。

平子などは、鯛子・鯖子なども含むが、真鰯や鯛の幼魚で仙崎平子が

中心であつた。煎と同じように補助的に仕入れられたものであろう。

その他は、出雲鯡・宇和ハゼ・泉州蟹・ぶり粉・鱈干鰯・わた・碎・油粕などがあつた。肥料になるものなら何でも利用した様子がかかる。また慶応二年には油粕の仕入れも行われた。慶応元年には魚屋は赤穂藩から油絞業の免許を得ているので、その関連で、近隣業者と取引もできたのであろう。

蝦夷地産魚肥では、鯡粕が中心となつた。全体に対する比重を見ると五〇パーセント内外で推移している。羽鯡と合わせると文久元年（一八六一）が七〇パーセントを超えた以外は、常に六〇パーセント前後を占めていた。鯡粕には、ルルモツヘイ（留萌）鯡粕など産地名が付くことがあり、アツタ（厚田）・オシヨロ（忍路）・マシケ（増毛）・ソウヤ（宗谷）・タルマヘ（樽前）・アツケシ（厚岸）・唐太（樺太）・オタナヘ（小樽内）・嶋コマキ（嶋小牧）・シヤテン・フロなどの産地があがつている。西蝦夷地域（日本海・オホーツク側）のものが多かったようである。蝦夷地が幕領になると、松前藩が統制していた西蝦夷への船舶の交易が緩和されたことが、西蝦夷産地魚肥の流入となつているようである。

羽鯡は、鯡の身を取つた残りで、鯡粕に比べ安価であつたので利用された。鯡粕の仕入れの少ない文久二年（一八六二）などは、これを補うように仕入れが増加している。数子・白子では数子が中心で、羽鯡に並ぶ時があつた。その他には、マシケ粕など蝦夷地地名の粕の中

心に入れているが、城下粕やタルマへ粕は、鯛も獲れることで知られており、鯨粕とは限らなかったたのでその他に入れている。その他ではほかに、身欠き鯨・笹目・目切・目切鱗などがあつた。最後のその他・不明は、産地が不明なものである。鱗・石灰・鳥糞・大鯨粕・粕荷粕などがあつた。

四 明治期の肥料仕入れ

A 明治初年の仕入れ

表5-1, 2は、明治初年の仕入れの動向を示したものである。

表5-1は明治二年（一八六九）から明治六年（一八七三）までの仕入れ先一覧である。数値は金貨で示しているが、明治五年（一八七二）が最低で一四二五両余、明治三年（一八七〇）が最高で五〇七〇両余となっている。幕末期の慶応二年は物価高騰が最高潮に達した時期で、そのこともあつて仕入れは銀六九五貫匁余となっているが、これと比較すると、仕入れ規模は小さくなつていたようである。物価高のせいもあるが、例えば慶応二年と明治二年（一八六九）の仕入れ品目の重量を比較すると、明治二年（一八六九）では、干鯛がほぼ三倍になった以外は、すべて慶応二年（一八六六）の方が重量が多かつた。その後、明治六年（一八七三）まで主力の鯨粕・羽鯨・数子・白子で慶応二年（一八六六）の仕入れ重量を超える品目はなく、つぎの明治一二年（一八七九）になつて、ようやく超える仕入れ

表5-1 明治初年の仕入れ先(単位・明治5年まで両、同6年は円)

居所	名前	明治2年	明治3年	明治4年	明治5年	明治6年
兵庫	打出屋治兵衛	315	430	183	32	
	瓜屋伊兵衛		422			
	瓜屋嘉兵衛		410			
	他	42	6			64
大阪	助松屋作兵衛	466	821	412	207	1,378
	他	94				
	上方合計	916	2,089	700	239	1,442
室津	嶋屋半四郎	974	2,357	576	593	898
	箱館生産会所	749				
	他	33	166	1,181	223	26
	室津小計	1,756	2,523	1,757	816	924
下津井 鞆 尾道 高松			105			
		309	178	93		78
		105		145		260
	他		175	175		
	西国合計	413	458	413	277	339
	不明				92	12
	合計	3,085	5,070	2,869	1,425	2,717
	上方の比重	29.7	41.2	24.4	16.8	53.1
	室津の比重	56.9	49.8	61.2	57.2	34
	西国の比重	13.4	9	14.4	19.5	12.5
	嶋半四郎の全体の比重	31.6	46.5	20.1	41.6	33.1

出典：濱本家文書15-76~78各年度の「買仕入控帳」。

表5-2 明治初年の仕入れ

年代 品目	明治2年		明治3年		明治4年		明治5年		明治6年	
	俵数(俵)	重量(貫) 代金(匁)	俵数(俵)	重量(貫) 代金(匁)	俵数(俵)	重量(貫) 代金(匁)	俵数(俵)	重量(貫) 代金(匁)	俵数(俵)	重量(貫) 代金(匁)
干鰯		1,473 150	174 669	21 4	73 29	18 18	55			
メ粕										
キビナゴ	20	42			10 22	138 729	332			
煎										
平子など						330	66	129	84	26
他	100匁	718 124	50 178	10 1	20 18					9
鮭										
鮭粕		7,754 1,827	9814 2,318	11,152 1,737	4,348 478			131 24		
羽鮭		241 33	3,113 673	1,311 205	1,576 153			7,875 1,154		
数子		3,121 907	4,207 1,211	2,542 652	2,071 274			2,408 301		
白子	15	2						3,819 604		
他			81 21	1,467 245	75			71 12		
他・不明				28 3,317				2,382 406		
合計	34, 535 /100匁	13,307 3,085	224 17,215 5,070	10 16,552 2,869	561 9,790 1,425			147 17,490 2,717		
北海道産品										
鮭粕		89.8	83.3	98.9	68.8			92.1		
羽鮭		59.2	45.7	60.5	33.6			42.5		
数子		1.1	13.3	7.1	10.7			11.1		
		29.4	23.9	22.7	19.2			22.2		

出典：表5-1に同じ。

仕入れ先について見ると、室津とその中心だった嶋屋半四郎からの仕入れが一定の比重は占めながら、幕末期のような圧倒的なものではなくなってきた。その代わりに上方と西国が増加したが、とくに上方の比重の増加が著しかった。兵庫では打出屋治兵衛、瓜屋伊兵衛(喜

助改)、瓜屋嘉兵衛などからの仕入れがあった。瓜屋嘉兵衛は明治三年(一八七〇)の干鰯屋仲間「戎講印形帳」では、年寄となっていた。屋内海作兵衛が初めて取引に現れ、明治二〇年代まで継続取引を続けることになった。助松屋の屋号は干鰯屋仲間の寛政講に初めて助松屋

が出るようになる。慶応二年のピーク後、明治初年になるとやや低迷していた状況であった。

間本組のなかに見られ、同じ時期の間屋組にはないので、仲買を中心とした干鰯屋の系列であったようである。⁽²²⁾ 間屋組・本組が一体となった住吉講の嘉永五年（一八五二）と文久元年（一八六一）の名簿のなかには両方に助松屋作兵衛の名前がある。⁽²³⁾ 明治六年（一八七三）には、上方の仕入れ金額が室津を超えるが、その中心は助松屋からの仕入れであった。西国も、室津が少なくなった分一〇パーセント前後で推移した。中心は鞆の大坂屋万右衛門、尾道の津国屋伴助との取引が幕末から継続していた。表5-12は明治二年（一八六九）より明治六年（一八七三）までの魚肥の品目をあげたものであるが、幕末期から引き続いて、明治五年以外は北海道の鯡類が九〇パーセント内外を占めている。また鯡粕と羽鯡を合わせると六〇パーセント内外で、これも幕末期の動向を引き継いでいた。

B 明治一〇年代から明治二〇年代の仕入れ

この時期は、西南戦争後のインフレ期と明治一五年（一八八二）にははっきりしてくる松方デフレ期、明治一九年頃からの復興期とに分けられる。仕入れ総額の動向もほぼこれに沿っている。

表6-1に仕入れ先の動向を示した。前半では明治一四年（一八八一）に一万二六一六円余となり、その後、デフレの進行とともに仕入れ額は低迷していった。明治一八年（一八八五）に底とな

り、明治一九年（一八八六）には回復、その後廃業まで低調であった。仕入れ先では、明治初年からの動きを引き継いで、室津からの仕入れが不安定となり、明治二〇年代にはまったく仕入れがなくなってしまうことが特徴である。なお明治二四年（一八九一）には山陽鉄道が赤穂の有年まで延伸し、相生湾の北端の那波に停車場ができ鉄道の利用が可能となった。⁽²⁴⁾ いっぽう室津には線路が通らず、同港は孤立するようになった。しかし助松屋内海作兵衛の魚肥の仕送りは明治二七年（一八九四）まで船輸送であったので、当面、室津からの仕入れの途絶とは関係ないようである。室津の仕入れの減少を埋め合わせたのが上方と西国であった。また北国に分類したが北前船主との取引もしばしば見られた。

上方では、兵庫の吉崎久兵衛からの仕入れが断続的に行われた。吉崎久兵衛（川崎町）は明治一四年（一八八一）の兵庫肥物仲買仲間の「営業人名簿」に見える仲買である。他には、川崎町の木村嘉吉、本町の瓜屋森田半兵衛、船大工町の佐久間慶三郎も「営業人名簿」に名前があるが、いずれも個別には大きなものではなく、その都度、仕入れが行われた。⁽²⁵⁾ また明治二三年以降は兵庫宮崎町の藤商会や東出町の入江常七から仕入れがあった。これにたいし大阪では助松屋内海作兵衛からの仕入れが、明治二二年（一八七九）から継続して行われ、規模も大きかった。両者は相当に親密な関係であったようで、五代目弥七郎は加古郡西谷村大西彦平の姉を内海作兵衛の娘として、後妻に

治一九年(一八八六)は兵庫の仕入れが途絶えるが、これは魚屋の手
井屋東盛源蔵からで、林庄兵衛などからも断続的に仕入れていた。明
なり、岡山県玉島からの仕入れが目立つようになった。その中心は吉
もらい受けたという。⁽²⁶⁾ また瀬戸内海諸港では、鞆からの仕入れがなく

場合は、「買仕入控帳」では兵庫に記載されているので、兵庫での取
いっぽう北国としたのは、福井県橋立の北前船主岩田正吉、寺谷源七
船相生丸での仕入れが五三九九円余と大規模に行われたためである。

表6-1 明治10～20年代の仕入れ(単位:円)

居所	名前	明治11年	明治12年	明治14年	明治15年	明治16年	明治17年	明治18年	明治19年	明治24年	明治25年	明治26年
兵庫	吉崎久兵衛		436	2,804	2,675	196				232	228	546
	他			1,136	490						2,934	2,856
大阪	助松屋内海作兵衛		2,613	6,219	433	2,520	2,549	2,979	1,761	4,056	2,830	3,706
	他					471				418		251
室津	上方小計		3,050	10,159	3,598	3,187	2,549	2,979	1,761	4,706	5,993	7,359
	嶋屋三木半四郎	2,243	978		2,893	599	2,790	724	693			
	金屋藤本長左衛門	405	66	586	495	202	202	60	135			
	吉野喜助	933		1,639	2,893		361	48	260			
	他	484	146	232		61						
室津小計	4,065	1,190	2,458	6,281	660	3,353	833	1,088	0	0	0	
下津井		1,253	1,559			1,432	354	100	1,135	612		
玉島	吉井屋東盛源蔵	1,223	917			1,204	402	196		834	419	
	他	742				1,309	448	919		1,440		
玉島小計	1,964	917			2,513	849	1,114			2,275	419	0
他		5	1,715			1,458	1,280	36	5,839	16		
		3,222	4,190			5,403	2,483	1,250	6,974	2,902	419	0
西国小計			1,189				393	1,566	1,758			
北国			25									
不明												
合計		7,287	9,644	12,616	9,879	9,251	8,778	6,627	11,581	9,031	6,412	7,359
上方の比重		0	31.6	80.5	36.4	34.5	29	44.9	15.2	52.1	93.5	100
室津の比重		55.8	12.3	19.5	63.6	7.1	38.2	12.6	9.4	0	0	0
西国の比重		44.2	43.5	0	0	58.4	28.3	18.9	60.2	32.1	6.5	0
北国の比重		0	12.3	0	0	0	4.5	23.6	15.2	15.8	0	0

出典：濱本家文書15-79～82各年度の「買仕切帳」。

表6-2 明治10～20年代の仕入れ品目

年代	明治11年		明治12年		明治14年		明治15年		明治16年		明治17年		明治18年		明治19年		明治24年		明治25年		明治26年			
品目	俵数	重量 (貫)	代金 (円)	俵数	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)	重量 (貫)	代金 (円)		
干鰯					215	47	2,195	301							64	81								
ノ粕					86.174	俵					11	22			23,355	3,784					1,142	275		
キビナゴ																								
煎																								
平子など	293		115																					
他					1,440	209								1,943	150	4,337	359							
鯡									828	163	7,960	1,038	1,794	206										
鯡鮓		14,152	2,999		22,003	5,632	41,478	10,093	18,105	4,372	22,518	4,621	28,839	4,430	18,671	2,400	22,374	3,233	21,971	4,422	16,904	3,727	13,163	3,044
羽鯡		3,859	738		136	3,283	766	2,847	3,994	909	11,211	1,839	1,795	278	6,402	811	3,710	497	7,396	1,156	3,713	762	3,817	767
数子		4,114	900			5,698	1,417	3,223	1,079	7,423	968	11,424	1,359	9,223	1,273	6,067	959	7,500	1,524	4,432	1,043	3,257	760	
白子		4,519	1,015			2,656	732			4,188	613	2,803	457	8,898	1,352	13,101	2,163	8,601	1,928	566	141	5,611	1,403	
他		2,268	351							11,242	2,925	5,913	1,046	6,399	984	3,440	436							
他・不明		4,834	1,169		5	52	1,325	298			1,398	210									7,727	738	10,303	1,109
合計	293	33,746	7,287	136	37,989	9,644	49,206	12,616	41,640	9,879	52,081	9,251	60,628	8,778	51,071	6,627	73,010	11,581	45,468	9,031	33,343	6,412	37,293	7,359
北海道比重			82.4			88.6		94.6		93.9		100		97.4		97.7		100		100		100		96.3
鯡鮓比重			41.2			58.4		80		44.3		50		36.2		36.2		49		49		58.1		41.4
羽鯡比重			10.1			7.9		6		9.2		3.2		12.2		12.2		4.3		12.8		11.9		10.4
数子比重			12.4			14.7		8.6		10.9		15.5		19.2		19.2		8.3		16.9		16.3		10.3

出典：濱本家文書、表6-1に同じ。

廿年

東本願寺の本堂上棟式に参詣のついでに、敦賀の清水家や橋立の寺谷とあり、明治二〇年（一八八七）には魚屋の手船相生丸で敦賀で受け取ったことがわかる。⁽⁸⁾ 明治二二年（一八八九）、六代目弥七郎は京都

清水仁三郎

越前国敦賀港

引であったと考えられる。また寺谷源七は明治一八年にその持船幸徳丸に魚屋が四分の出資を行ったことから仕入れも行われた（表1参照）。清水仁三郎の場合は、

亥年七月二日
手船相生丸積
一、江差産は鯡式千七百束

家を訪れ、信州善光寺から関東・仙台を廻って帰っており、北前船主などと深い結びつきがあった。⁽²⁹⁾

品目について表6-2を見ると、明治初年から引き継いで、北海道産の魚肥が九〇パーセント前後を占め、西国産のものは補足的なものに過ぎなくなり、明治十九年を例外に、明治二〇年代になるとまったく仕入れられなくなる。明治十九年(一八八六)は、手船相生丸が大量にメ粕を仕入れてきたからである。「メ粕」とのみあるので、北海道産品に加えていないが、白子・数子とともに仕入れられているので、北海道産であった可能性もある。

明治二五年(一八九二)からは志那大豆粕の仕入れが始まった。仕入れ先は兵庫の藤商會が中心で大阪の内海作兵衛からも仕入れられていた。兵庫県神東郡藪田村の高瀬屋の場合、明治二四年(一八九一)に初めて大豆粕が仕入れられ、翌年にはその重量が鯉粕を超えた。⁽³⁰⁾ 相生の魚屋もほぼこの頃から大豆粕を仕入れるようになったことがわかる。また高瀬屋の大豆粕仕入れは飾磨や姫路方面であったが、魚屋は兵庫・大阪であった。飾磨と取引関係が強くなかったことが考えられる。

まとめ

以上、幕末期の播磨相生の肥料商魚屋弥七郎魚肥仕入れについて見えてきた。以下、簡単に要約するところのようである。

魚屋弥七郎家は、播磨相生の住人で宝暦頃を当面の初代として、少

なくとも天保前期には肥料商として相当規模の商売を行っていた。天保元年(一八三〇)には、領主の赤穂藩より、藩主催の講に参加したなどの功績で名字を許され、嘉永期には札座の御用達しとなり、その財力を期待される存在だった。

魚屋の仕入れは、近くの古くから瀬戸内海交通の要衝だった室津港からが中心であった。とくに嘉永期から慶応期まで、嶋屋半四郎からの仕入れが高い比重を占め、これに続いて鍋屋甚右衛門からの仕入れがあった。しかし慶応期には、室津の比重と嶋屋半四郎の室津仕入れの全体での比重も低下した。室津の全体に占める比重の低下は、瀬戸内海諸港からの仕入れが増加したこと、また室津仕入れ内で、嶋屋半四郎の比重が低下したのは、箱館会所が設立され、そこからの仕入れが生まれたためであった。

上方では、兵庫の干鰯屋からの仕入れが一定数あり、大坂からも仕入れを行っていたが大きな比重は占めていない。兵庫では瓜屋半兵衛からの仕入れが文久二年(一八六二)まであり、打出屋治兵衛から断続的に仕入れが行われた。両者とも兵庫干鰯屋仲間属していた。大坂では鷺屋与七郎からの仕入れがあった。名前が一致するものはないが、鷺屋は古くからの大坂干鰯屋には多く見られた屋号で、海部堀に居住していたことから、干鰯屋仲間の一人だったと思われる。この時期は春先の仕入れが多く、瀬戸内・西国産のものが主となっていた。

ほかに瀬戸内海諸港の間屋から仕入れたものも、この時期を通じて

増加し、慶応二年（一八六六）にはほぼ三〇パーセントになった。下津井・軻・高松などの問屋からの仕入れが目立っている。下津井の津国屋伴助、高松の泉屋亦右衛門、軻の大坂屋万右衛門などが代表的な仕入れ先となっていた。

仕入れ品目では、蝦夷地産の魚肥が総仕入れ銀額の八〇パーセントを占めている。この内、鱒粕が四、五〇パーセント台で、羽鱒と合わせてと六、七〇パーセント台となった。西国・瀬戸内海産のものも一定数あったが、目に付くのは五島産の干鰯やキビナゴなど五島産のものがあり、佐伯・宇和ものはあまり多くはなかった。また銀高は少ないが煎魚肥が見られるのも他の仕入れではあまりない特徴であった。

明治初年になると、幕末期の慶応二年（一八六六）をピークに仕入れ量はやや低下し、明治一二年まで戻らない。そのなかで室津の嶋屋半四郎からの仕入れ金額は、幕末期のような高い比重を占めなくなる。室津からの仕入れの比重も同様で、その分、上方・西国からの比重が高くなった。これまで取引のなかった大阪の干鰯屋助松屋内海作兵衛からの仕入れが始まり、明治二〇年代まで続いて、仕入れの中心となっていく。またこの時期、下津井・軻・高松などからの仕入れも広がり、瀬戸内海諸港と広い交易が行われたことがわかる。品目は干鰯なども仕入れられていたが、基本は北海道産品で九〇パーセント内外となった。

明治一〇年代から同二〇年代は、室津からの仕入れが次第に低下

し、明治二四年（一八九一）からはまったく途絶えた。それに変わって大阪の比重が高まっていった。助松屋内海作兵衛からの仕入れが中心となり、兵庫や瀬戸内海諸港が加わったが、新しいものとしては岡山県玉島港の東盛源蔵からの仕入れが見られた。品目では、北海道産の鱒粕・羽鱒と数子が中心で単純化と大阪肥料商への集約化が大きな流れとして見られたといえよう。また明治二五年（一八九二）には中国産大豆粕の仕入れが始まり、つぎの段階への動きが見られた。

本論で対象とした時期は、蝦夷地の大半が幕府に収公され北前船の活動が活発化する時期から、商社などによる北海道との汽船の運賃積みも展開し始め、東京・大阪・兵庫（神戸）など中央市場へ魚肥も集約される方向が出てくる時期であった。瀬戸内海の小港相生の肥料小売商魚屋の仕入れ動向は、この動きを何ほどか反映している。室津中心の仕入れの後退と途絶、瀬戸内海諸港からの仕入れ、大阪助松屋からの仕入れが中心への移行、北前船主との交流、さらに瀬戸内海・西国産干鰯・鱒粕や多様な魚肥から鱒粕・羽鱒・数子などへの集約化の動き、そして大豆粕の仕入れなどその全国的な市場変動にたいする魚屋の対応といつてよいであろう。

注

(1) 兵庫県相生市濱本博厚家文書。現在、同家文書は兵庫県立博物館に所管されている。以下同家文書は濱本家文書と略記する。

- (2) 鯉魚肥及び北前船については、中西聡『近世・近代日本の市場構造』(東京大学出版会、一九九八年)。八章参照。
- (3) 瀬戸内海の地域市場の展開と特質については、西向宏介「幕末の市場構造と流通」(明治維新史学会編『講座明治維新』八巻、有志舎二〇一三年)。
- (4) 兵庫県史編纂専門委員会編『兵庫県史』史料編近世三(兵庫県、一九九三年)一八頁。
- (5) 相生市史編纂専門委員会編『相生市史』二巻(相生市教育委員会、一九八六年)五四七～五五三頁。
- (6) 濱本家文書一七一―一番。年不詳「諸事録」。以下、とくに注しない限り、「諸事録」による。
- (7) 濱本家文書一五一―八二番。明治二三年正月「買仕切留帳」。
- (8) 濱本家文書一五一―一番。天保八年正月「干鯛当座帳」。
- (9) 「日本全国商工人名録」(渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成』二、柏書房、一九八四年)。
- (10) 相生市史編纂専門委員会編『相生市史』三巻(相生市教育委員会、一九八八年)二六一～二六四頁。なお地主から金融資本への転換が魚屋は他の瀬戸内海地方の地主より早かったとされる。
- (11) 拙稿「幕末期における干鯛仲買と地域市場」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』一〇号、二〇〇九号)。以下、飾万の嶋屋仁左衛門の事例については、本論文による。なお近世では飾万と書かれることが多く、明治になって飾磨となったので、ここでは飾万を使用した。
- (12) 開拓史蔵版『西南諸港報告書』(明治十五年二月出版、商品流通史研究会編『近代日本商品流通史資料』二巻、日本経済評論社、一九七九年)。
- (13) 濱本家文書一五一―四三番。嘉永五年正月「干鯛通」。なお目録では嘉永三年となっているが、引用部分に「亥十二月差引残り」とあり、嘉永の亥年は嘉永四年であるので、本史料が嘉永五年であることは間違いない。同帳の表紙の年代が剥落していたため誤ったと考えられる。
- (14) 神戸市立博物館所管、明治三年干鯛屋仲間「戎講印形帳」。
- (15) 『大阪穀肥料市場沿革史』(大阪府肥料卸商業組合、一九四一年)五一～五二頁。宝暦一〇年十二月、干鯛仲買戎講名前所に鷺屋半兵衛の名前が見えるのが古い例である。
- (16) 三宮市郷土資料館蔵、六一―二四番、「(干鯛)定目」。
- (17) 田島佳也「近世北海道魚業と海産物流通」(清文堂、二〇一四年)五章「箱館産物会所の実態と特質」。
- (18) 濱本家文書一五一―一九番。慶応三年正月「歳々諸用事帳」。
- (19) 中西聡「近世・近代日本の市場構造」(前掲)二八四～二九〇頁。
- (20) 神戸市立博物館所管、明治三年干鯛屋仲間「戎講印形帳」。
- (21) 『大阪穀肥料市場沿革史』(前掲)五三頁。
- (22) 国文学研究資料館所管、祭魚洞・大坂干鯛問屋仲間記録、文政九年「組合申合印形帳」。
- (23) 国文学研究資料館所管、祭魚洞・大坂干鯛問屋仲間記録、嘉永五年「神楽講」、文久元年「記録名前帳」。
- (24) 相生市史編纂専門委員会編『相生市史』三巻(前掲)二五六～二五八頁。
- (25) 神戸市立博物館所管、明治一四年「営業人名簿」。
- (26) 濱本家文書一七一―一番。年不詳「諸事録」。
- (27) 「日本全国商工人名録」(渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成』前掲)。
- (28) 濱本家文書一五一―八一番。明治一六年正月「買仕切留帳」。
- (29) 濱本家文書一七一―一番。年不詳「諸事録」。
- (30) 拙稿「一九世紀中葉における播磨の在村肥料商の動向」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』二二号、二〇二〇年)。

追記

本論文は二〇一七～二〇一九年文部科学省科学研究費補助「近世後期の市場変動と肥料商」(課題番号一七K〇三二〇八)の成果の一部である。論文作成にあたっては、快く古文書の閲覧を許された濱本博厚氏及び兵庫県立

博物館の皆様 に記して深謝の意を表す次第です。

キーワード 肥料商 鯨粕 鯨 瀬戸内海 播磨